論文要旨

論文題目: イソップにおける翻訳の問題

名前: コバニ･マリア

No: LD081007

論文のテーマはイソップの寓話である。イソップの寓話を研究することによって読者は思慮分別や常識の価値基準を学びながら、架空の世界へと飛び回る旅をすることができる。イソップの寓話が誕生して 2600 年以上経過しているが、今なお、この寓話と道徳は、社会的な意味を持っている。また、このことは世界中でイソップの寓話が頻繁に翻訳されていることによって立証されている。それらの翻訳について重要なのは、読者が逐語的な翻訳と、より動的な翻訳を取捨選択することができるという点である。

確かに、おそらく「逐語的な翻訳」と呼ばれるこの形式の翻訳は、構造的な等価性を表す最も典型的な例である。そこでは翻訳者は、可能な限り原本の言語の形式と内容を文字通り、また、意味をなすように再現することを試みる。しかしながら、そのような翻訳は、テクストを完全に理解できるものにするために、多数の脚注が必要となるだろう。そしてこの形式の翻訳、つまり逐語的な翻訳は、目標言語の読者が自分自身を起点言語の話者・読者とできるだけ完全一致させることを可能にするものとして作られている。それと同時に、習慣や考え方及び表現の方法について可能な限り理解することが予定されている。

対照的に、形式的な等価性よりも、動的な等価性を生み出すことを試みる翻訳は、等価の効果の原則に基づいている。翻訳された文章の読者とメッセージの関係性は、原文の読者とメッセージの関係性と、事実的に同じであるべきである。動的な等価性を目標とする翻訳では、読者自身の文化の文脈にできる限り合わせる形で、目標言語による表現が自然であることを目指す。即ち、それは受容者がメッセージを理解するために、原文の文脈における文化の形式を理解していることを強調するのではない。

その上、これらの翻訳のおかげで、今日になってもなお、読者は短い寓話を通じて貴重な人生の教訓集を簡単に読むことができる。そして、多くの寓話では、動物を登場させて、最後的には、教訓を明確に記述している。2600 年以上前から、様々な人々が、

寓話や物語に読む価値があることを認めている。私はそれに何も加えることができない。私はただ、人々が考えるよりも多くの作品が存在し、それが巧みに書かれているという点を強調するのみである。

私は、イソップの寓話を使用しながら、ギリシャと日本の文化について比較文化の観点から検討をした。最初に、口承文学の特徴について検討して、その普遍的性質に関して論じた。イソップの生い立ちには、まだよく分からない点が残っているが、彼の作った寓話は有名になっている。そして、彼の物語は様々な言語に翻訳された。イソップは彼の寓話を通じてギリシャ社会の価値観を明らかにした。彼は、偉大な教師として、風紀を正したり、悪を非難したり、美徳を賞賛したりした。そして、彼の物語はギリシャ人にとって、誰もが知っている教訓となった。ギリシャの学校では教材として、イソップの寓話が使われている。また、日本でも、イソップの寓話は学校の教科書に載せられて、教材として使われている。現在は、ギリシャと日本に寓話の多くの翻訳がある。この翻訳を用いて、ギリシャと日本の言語と文化を理解したいと思う。

特に、言語と文化と社会は三つの関連する要素である。文化は社会の価値や考え方によって影響を受けるので、文化を理解するためには、人々の価値観と考え方を理解しなければならない。さらに、言語は文化によって構成されたものなので、言語を理解するためには、文化の内容について認識しなければならない。

文化は価値観のシステムとして、個人の振る舞いを形成したり、個人の世界観を構成したりする。また、個人のレベルだけでなく、社会についても同じことがいえる。あらゆる文化には、普遍的法則には還元できない特別な規則と規範がある。そのことは異文化コミュニケーションの場面で、はっきり現れる。異文化コミュニケーションに参加するためには、言語的な能力以外に、異なる集団に属する人々の考え方に関しての知識も必要である。人々の言語と身振りが異なるため、言語及び非言語的な表現を誤解することが往々にしてあり、そのことが異文化コミュニケーションの障害となっている。異文化コミュニケーションの参加者は、全ての文化には独自の特徴があり、したがって互いの文化には相違があることを理解しなければならない。

このような異文化性とその翻訳の問題を理解するために、本論文ではギリシャと日本の文化における相違点と類似点に関する研究をおこなう。特に、色々な理論に基づいて、

ギリシャ語から日本語への翻訳の際に起こる問題について検討をした。同じものを指す言葉が、それぞれの言語では異なる意味をもつことがある。そして、単語は指示対象的な意味とは別に、語用論的な意味を持っている。論文の目標は、ギリシャ語で書かれた作品の翻訳の在り方を通じて、ギリシャ人と日本人の考え方や表現法の違いについて理解するということであった。ギリシャ語と日本語の翻訳を学ぼうとする学生は、まず最初に、この二つの文化と言語の相違点と類似点について認識しなければならない。さらに加えて、具体的な実例に基づいて考えるなら、学習者は言語の実際の使用法を学ぶことができる。

本論文は、次の六章からなる。(1)翻訳、(2)イソップ、(3)アリストパネース、(4)日本語への翻訳、(5)分析、(6)結論。各章の概要は以下の通りである。

1. 「第一章 翻訳」の概要

第一章では、翻訳の科学とそのプロセスについて述べる。スピーチの通訳や書物の翻訳は、異なる言語の人々の間のコミュニケーションを可能にする技術として歴史的に重要な役割を果たしてきたが、アカデミックな問題として翻訳に関する研究が始まったのは、わずか五十年前からにすぎない。約五十年前に翻訳の科学が生まれ、多くの翻訳に関する理論が作られて、Translation Studies という新しい分野が開けた。本論文では、紙面の制限から全ての翻訳理論について詳しく述べることはできないが、Hatim、Mason、Newmark という代表的な研究者の等価性の理論について検討し、その理論を使ってギリシャ語の原本と日本語の翻訳テクストを比較し、原本の作家の Vouloir Dire（意味作用＝言おうとすること）と翻訳者の翻訳ストラテジーを分析する。研究対象としては文学的なテクストの翻訳を取り上げる。

2.「第二章 イソップ」の概要

第二章では、イソップという人物について述べる。イソップは、自分の寓話を書物に著さなかったが、他の作家の作品を通して彼の寓話が伝えられてきたので、今では世界中に広まっている。イソップの生涯に関しての情報は多くないが、後世の著作家の手によって、古代から伝えられている多くの寓話からそれらの情報が集められた。イソップの寓話は昔から子供や大人の教育のための教科書として使われてきた。ギリシャでは、それらが重要視されて、ギリシャ人の考え方や社会的な価値観に大きな影響を与えてき

た。それ故に、「一匹でもレオンだ」などのイソップ寓話の表現は今でも日常的な会話で使われている。この章では、イソップの言語と方言についての検討も行う。

3.「第三章 アリストパネース」の概要

第三章では、イソップの寓話に基づいた作品を初めて著した劇作家アリストパネースについて述べる。アリストパネースには、イソップと異なる特徴と共通する特徴がある。異なる特徴としては、イソップが奴隷であったために政治家について自由に話せなかったのに対して、アリストパネースは自由人として政治的な問題について風刺できたという点である。共通する特徴としては、二人ともギリシャ人の教育に興味を持っていたことである。アリストパネースは、自分の教育的な劇(例えば、『蜂』という喜劇)でイソップの寓話を使っている。

イソップの生涯と寓話に関する情報の多くはアリストパネースの作品から収集された。イソップの寓話はアリストパネースの時代でも人気があったので、アリストパネースはイソップをモデルにして擬人化した動物の劇を作り、イソップの寓話を語らせている。アリストパネースによると、イソップはギリシャの偉大な教育者であるので、イソップの寓話を知らない人は教養のない人であるという。

この章では、アリストパネースとイソップの関係と、『蜂』というアリストパネースの喜劇について検討する。

4.「第四章 日本語への翻訳」の概要

第四章では、イソップの『寓話』とアリストパネースの『蜂』の原本がどのように日本語に翻訳されたかを検討する。とくに、最初に行われた翻訳と現在の翻訳について述べる。

5.「第五章 分析」の概要

第五章では、Delisle、Tatilon、Nida、Baker という四人の研究者の理論を使って、原本の情報(textual information)と翻訳された情報についての分析を行う。分析の事例としては、原本としてイソップの四つの寓話と『蜂』を選び、それらの日本語への翻訳本を取り上げる。

6.「第六章 結論」の概要

最後の第六章では、第五章の分析から得られる結論として，本論文の目標であるギリシャ語と日本語の概念、ギリシャ人と日本人の考え方の類似点と相違点について述べる。

翻訳は、科学や芸術であるだけではなく、思想や感情を交換するための実用的なツールでもある。翻訳の重要性は、異なる文化を持っている民族の間の接触と交流によって高められてきた。言語の障壁以外にも文化の相違があるため、東洋と西洋のコミュニケーションの問題はより難しい側面を含むことになる。多くの研究では、翻訳が言語学的な見地から考察されているが、本論文の目的は文化論的な観点も含めて翻訳過程を研究するものである。